

箱崎 39

— 箱崎遺跡第61次調査報告 —

2010

福岡市教育委員会

箱崎 39

— 箱崎遺跡第61次調査報告 —



遺跡略号 HKZ-61

調査番号 0811

2010

福岡市教育委員会



1. 1区東半全景（北より）



2. 2区全景（南より）



1. 3区全景（東より）



2. SX101検出状況（北より）

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い実施した箱崎遺跡第61次調査の成果を報告するものです。今回の調査では中世の集落跡を確認するとともに、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は東区箱崎3丁目3371-1の一部、3373-3の一部において発掘調査を実施した箱崎遺跡第61次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は米倉法子が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は米倉、今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
9. 第4章第2節については福岡市教育委員会専門調査員の山崎純男が執筆し、その他の執筆及び編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	4
第4章 おわりに	29
1. まとめ	29
2. 第61次調査出土の自然遺物について	30

挿図目次

第1図 箱崎遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50000)	2
第2図 箱崎遺跡調査地点位置図 (1/5000)	3
第3図 調査区位置図 (1/1000)	3
第4図 調査区全体図 (1/100)	折込
第5図 調査区土層図(1/60)	5
第6図 SD005・006・042実測図 (1/80・1/40)	6
第7図 SD005・006出土遺物実測図 (1/3)	7
第8図 SD042出土遺物実測図① (1/3)	9
第9図 SD042出土遺物実測図② (1/3)	10
第10図 SE082実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	11
第11図 SK002実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図① (1/3)	12
第12図 SK002出土遺物実測図② (1/3)	13
第13図 SK023実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	14
第14図 SK033実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	15
第15図 SK040実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	16
第16図 SK069実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	17
第17図 SK084実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	18
第18図 SK085実測図 (1/40) 及びSK075・085出土遺物実測図 (1/3)	19
第19図 SK086・091・092実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	21
第20図 SK095・097・098・099実測図 (1/40) 及び 出土遺物実測図 (1/3)	22
第21図 SK105・122実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	23
第22図 SK148・162実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図① (1/3)	25
第23図 SK162出土遺物実測図② (1/3)	26
第24図 SK174実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	27
第25図 SX101実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	28
第26図 その他の出土遺物実測図 (1/3)	28
第27図 出土鉄器・銅錢 (1/2, 1/1)	29

図版目次

卷頭図版 1	
1. 1 区東半全景 (北より)	
2. 2 区全景 (南より)	
卷頭図版 2	
1. 3 区全景 (東より)	
2. SX101検出状況 (北より)	
図版 1	
1. 1 区全景 (東より)	
2. SD005・006 (南より)	
3. 1 区SD042 (南より)	
4. 2 区SD042 (北より)	
図版 2	
1. 1 区SE082 (南より)	
2. SK002 (西より)	
3. SK033 (北より)	
4. SK040 (北より)	
5. SK069 (北より)	
6. SK085 (南より)	
図版 3	
1. SK086 (南より)	
2. SX101検出状況 (北より)	
3. SX101貝層検出状況 (北より)	
図版 4	
出土遺物	

第1章 はじめに

1. 経緯

平成20年2月21日、河嶋喜久郎氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に対して、福岡市東区箱崎3丁目3371-1の一部、3373-3の一部における共同住宅建設に伴い埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて埋蔵文化財第1課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成20年3月19日に試掘調査を行い、現地表面下120cm前後で複数の遺構と中世の遺物を確認した。この結果を受けて申請者と埋蔵文化財第1課で協議を重ねた結果、建物建設工事部分については破壊が避けられないことから、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。その後、委託契約を締結し、平成20年5月12日から同年6月12日まで発掘調査を実施した。整理作業と報告書の刊行は平成21年度に行った。なお、発掘調査・資料整理の経費の一部について、国庫補助金適用要項に基づき国庫補助金を適用した。

調査番号	0811	遺跡略号	HKZ-61
調査地地籍	東区箱崎3丁目3371-1、3373-3の一部	分布地図番号	箱崎34
開発面積	252m ²	調査実施面積	190m ²
調査期間	2008.5.12～2008.6.12	事前審査番号	19-2-899

2. 調査組織

調査委託：河嶋喜久郎

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 管理係 古賀とも子（前任） 山本朋子（現任）

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 上角智希（前任） 藏富士寛（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博（現埋蔵文化財第1課調査係）

調査作業：阿部孝行 新垣誠 小出義之 許斐拓生 酒井康恵 重年直美 静啓子 定直康浩

高瀬州 高瀬美代子 西村寿美江 西村登 花田直文 原恵子 福島大 水田ミヨ子

御手洗あい 爭田邦博

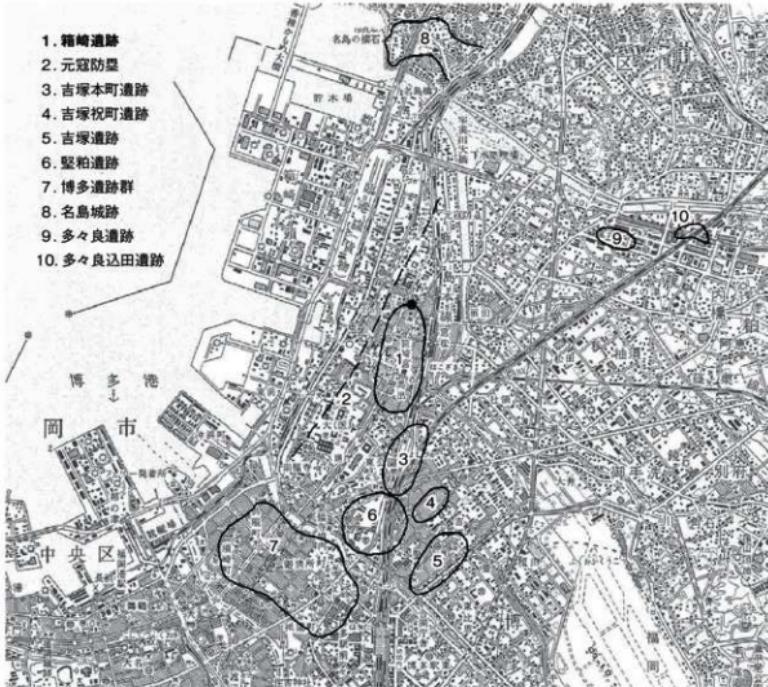
整理作業：柴田加津子

なお、発掘作業から報告書作成に至るまで、河嶋喜久郎氏および工事担当の大東建託株式会社の方々をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

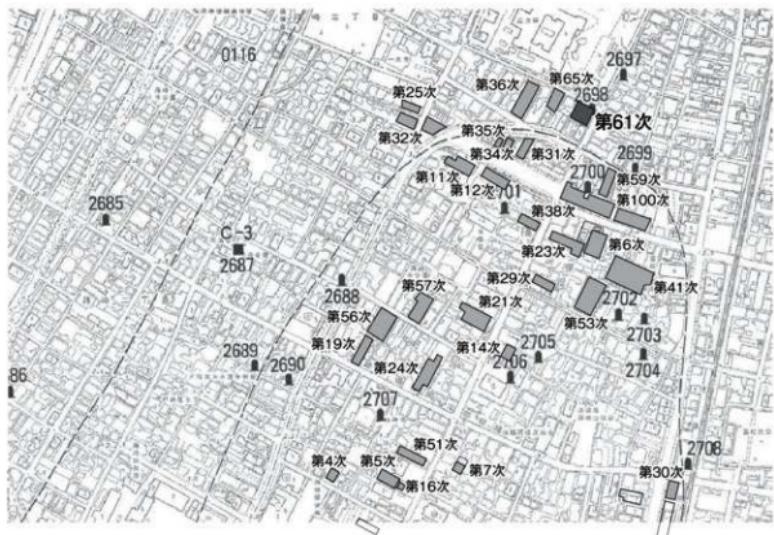
第2章 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は宇美川下流、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に伸びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、箱崎付近から室見川河口付近まで分布している。この砂丘上には箱崎遺跡の他に博多遺跡群、吉塚遺跡、西新町遺跡、藤崎遺跡、姪浜遺跡など、多くの遺跡が立地している。また、箱崎遺跡が立地する砂丘の西側には元寇防壁の推定線が延びる。

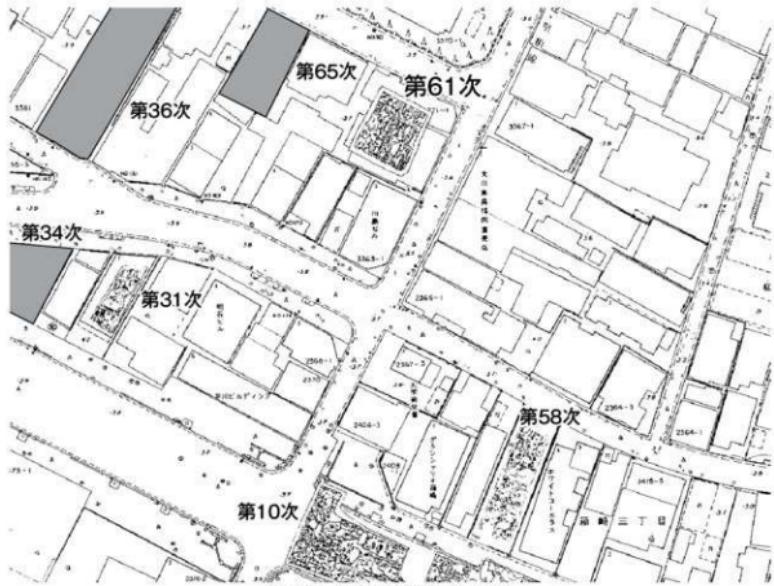
箱崎遺跡は筥崎宮付近を中心として南北約1000m、東西約500mの範囲に広がり、砂丘の標高は2.0m～3.5mを測る。これまでに65次に及ぶ発掘調査が実施されており、遺跡の時代的な変遷が掴めるようになってきた。この遺跡で最も古い遺物は刻目空突文土器や磨製石斧とされるが、これらは後世の遺構からの出土である。明確な遺構が出現するのは古墳時代前期になってからで、砂丘の東側斜面で竪穴住居址や周溝墓などが確認されている。10世紀には筥崎宮が創建され、宮東南の東斜面に当該期の遺構が展開する。砂丘西側斜面に遺構が築かれるのは12世紀中頃で、これ以降14世紀初頭頃まで遺跡のはば全面にわたって遺構が確認されている。砂丘西側斜面では焼土や炭化物を含む13世紀後半の焼土層が確認されており、文永の役（1274年）の際の筥崎宮焼失との関係が推測されている。14世紀中頃から16世紀にかけては筥崎宮南側に遺構が分布する傾向にある。



第1図 箱崎遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50000)



第2図 箱崎遺跡調査地点位置図 (1/5000)



第3図 調査区位置図 (1/1000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

本書で報告する第61次調査地点は箱崎遺跡の北端に位置する。周辺では10次・31次・34次・35次・36次・59次・65次調査が行われており、12～15世紀を中心とする集落が確認されている。

5月12日に器材の搬入、13日に表土剥ぎを行い調査を開始した。廃土置場の関係で調査区を三分割し、13日～22日に1区、23日～30日に2区、6月2日～6日に3区の調査を行った。6月9日に埋め戻し、10日に器材の撤収、12日にユニットハウスの撤去を行い、調査を終了した。

第5図に調査区の土層図を示した。調査前の標高はおよそ3.8mで、地表より40～80cmは現代の盛土である。その下に厚さ40cmほどの黒褐色砂及び褐色砂があり、その下が黄白色砂の砂丘面となる。黒褐色砂・褐色砂に遺物は含まれていたが、遺構を識別できなかつたため黄白色砂を検出面とした。砂丘の標高はおよそ2.6～2.8mである。検出した遺構は中世の構、土坑、ピット、木棺墓、貝殻焼成遺構、近世の井戸、土坑などである。出土遺物は12～13世紀を中心とする土師器、陶磁器、土鍤、銅錢、獸骨、貝殻などで、コンテナケース30箱分である。なお、陶磁器の分類については、太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡X-V陶磁器分類編』を参考とした。

2. 遺構と遺物

①溝 (SD)

SD005 (第6図、図版1-2)

1区東壁際で検出した、長さ5m、幅60cm、深さ70cmの溝である。断面はU字形で、黒色砂で埋まる。土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦器、陶器、瓦などが出土している。

出土遺物 (第7図)

1・2・4・5は土師器壺である。4・5の外底面は回転糸切りで、いずれも板状圧痕を有する。3は瓦器壺で、復元口径16.0cm。内面にはヘラミガキが施され、コテあて痕が残る。6～9は白磁碗である。6はV-4 b類の口縁部で、内面には櫛目文を施す。7はVII類の壺で、見込みの釉を輪状に搔き取っている。8はIV類の底部、9はV類の底部である。10は縫縫の陶器小片で、外面には釉下鉄彩が見られる。内面は無釉である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SD006 (第6図、図版1-2)

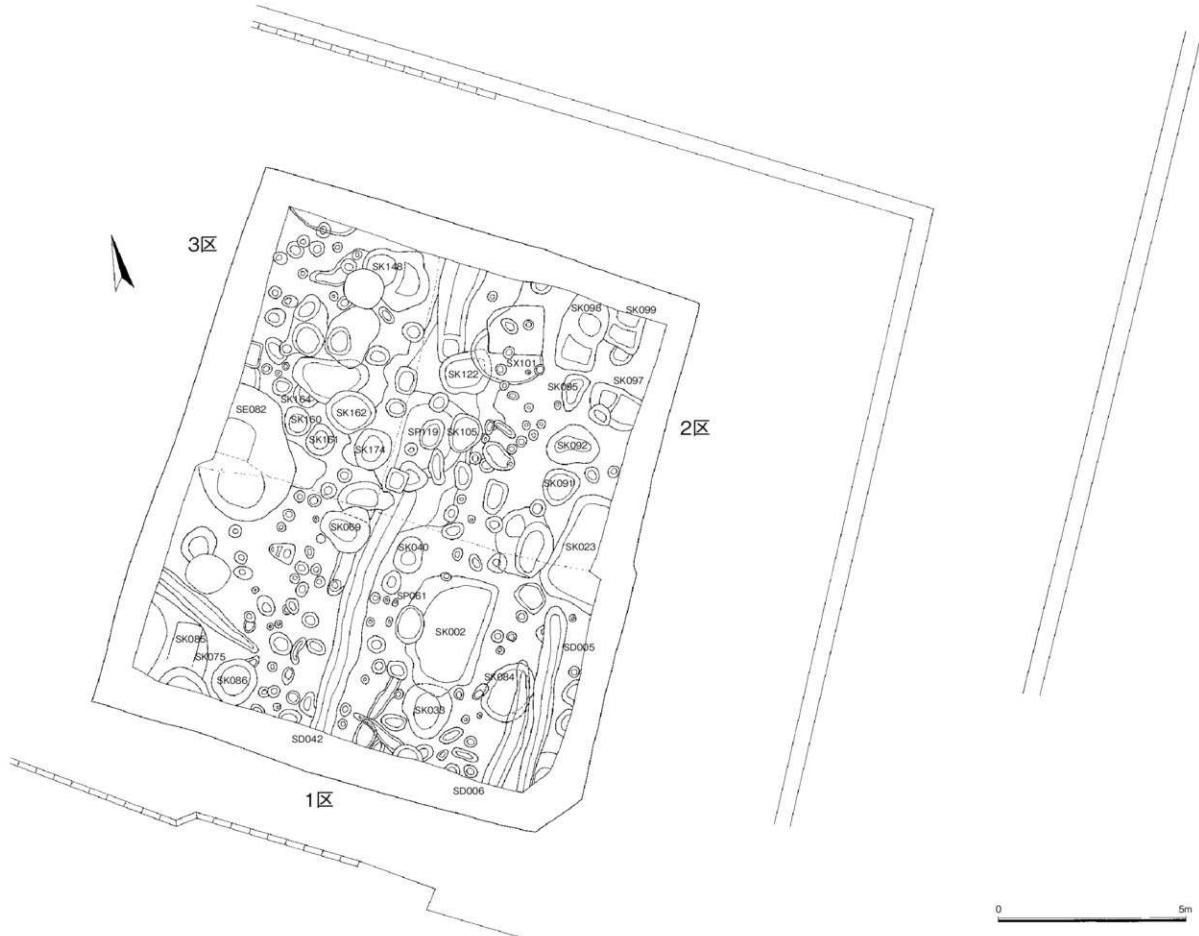
SD005に並行する溝である。長さ3.6m、幅60cm、深さ70cmを測る。断面はU字形で、覆土は黒色砂と白色砂が混じる。土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦器、陶器、瓦などが出土している。

出土遺物 (第7図)

11は土師器皿、12～14は土師器壺である。いずれも底部外面は糸切りで、板状圧痕が残る。15は瓦器壺で、内外面にヘラミガキを施す。16は瓦器壺の底部。17～21は白磁碗である。17は復元口径15.2cm、器高5.7cm。VI類に該当するであろうか。18はV類の底部を打ち欠いた瓦玉か。19もV類か。20・21はVII類の底部で、内面の釉を輪状に搔き取っている。22は縫縫の陶器壺、23は黄釉の陶器壺の底部である。24は平瓦で、凸面は繩目叩きをナデ消し、凹面には布目が残る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われ、SD005と大きな時期差は認められない。

SD042 (第6図、図版1-3, 4)

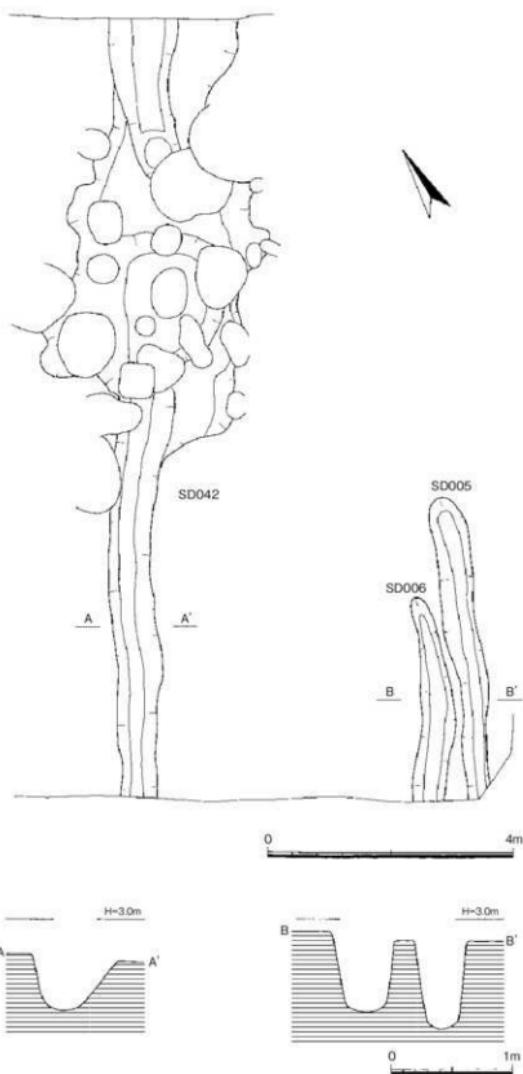
調査区中央で検出した南北方向の溝である。上述のSD005・006とは4mほど離れてほぼ並行している。調査区北壁から南壁まで続いている。長さ13m以上である。1区では明瞭な溝であったが、2区では形



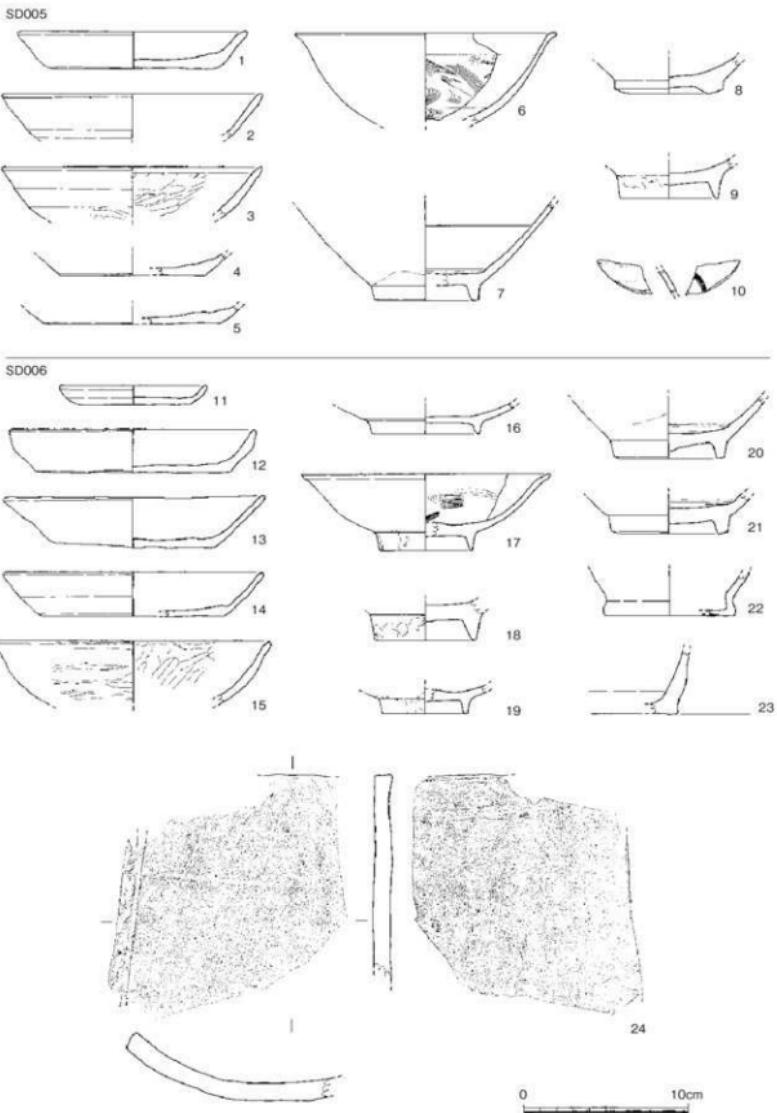
第4図 調査区全体図 (1/100)



第5図 調査区土層図(1/60)



第6図 SD005-006-042実測図 (1/80・1/40)



第7図 SD005・006出土遺物実測図 (1/3)

が崩れ、最大3mほどまで幅が広がり輪郭の不明瞭な落ち込みになっている。広がった部分は遺構の切り合いが激しい。北端部分は明瞭な溝状になっているが、1区部分の構と一連のものは不明である。土師器、陶磁器、瓦器、瓦、石錘、鉄滓、銅錢、鉄器などが出土している。

出土遺物（第8図、第9図）

25～30は1区部分、31～76は2区部分からの出土である。25は土師器壺で、底部外面は糸切りである。26は青磁碗、27は陶器壺の口縁部である。28はベルト部分から出土した火消壺の蓋である。近世の混入か。29は石錘で、縦方向に紐掛けの溝が刻まれる。30は軒丸瓦の小片である。31・32は土師器皿、33～36は土師器壺である。いずれも底部外面は回転糸切りで、33・34・35は板状圧痕を有する。37・38は土師質の鍋である。39・40は白磁皿である。39は皿V類に相当するか。内面には籠描文と櫛点描文が施されている。41～44は白磁碗である。43はIV類の口縁部、44はV類の椀である。45～49は同安窯系青磁碗である。45・46・48・49は口縁がわずかに外反し、外面には幅広の櫛描文を施す。50・51は瓦器碗で、内外面にヘラミガキを施す。52～56は陶器である。52・53は捏鉢、54は椀底部、55は鉢口縁部、56は蓋の底部か。57は丸瓦、58は平瓦である。ともに凸面は縄目叩き、凹面は布目が残る。59～75は管状土錘である。76は球形の土錘で、外面にも紐掛けの溝がある。これらの出土遺物から12世紀後半頃の遺構と思われる。

②井戸（SE）

SE082（第10図、図版2-1）

1区北西隅で検出した。調査区西壁と1・3区の境にかかったため、壁面崩壊の危険があり完掘することができなかった。長軸およそ3.6m、短軸およそ2.5mで、掘削は深さ1.7mまで行った。井筒部分は小礫を含んでおり掘方との識別は明瞭であったが、井筒部材は確認できなかった。

出土遺物（第10図）

77～82は掘方からの出土、83～87は井筒からの出土である。77は土師器皿、78は白磁碗V類の口縁部である。79は青白磁の合子身で、体部に菊弁文を型押ししている。80は黒色釉がかかる小片である。天目碗か。81は土師器壺で外底面は糸切り、82は須恵器壺の胴部で、外面は縦長の格子目タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。83は白磁碗V類の口縁、84は白磁碗底部である。85は同安窯系青磁碗I-1 b類で、外面は猫搔き、内面には籠描文と櫛点描文が施される。86は瓦器碗口縁部で外面にヘラミガキを施す。87は陶器の壺である。図示していないが出土遺物には近世瓦も含まれており、遺構の時期は近世以降と思われる。

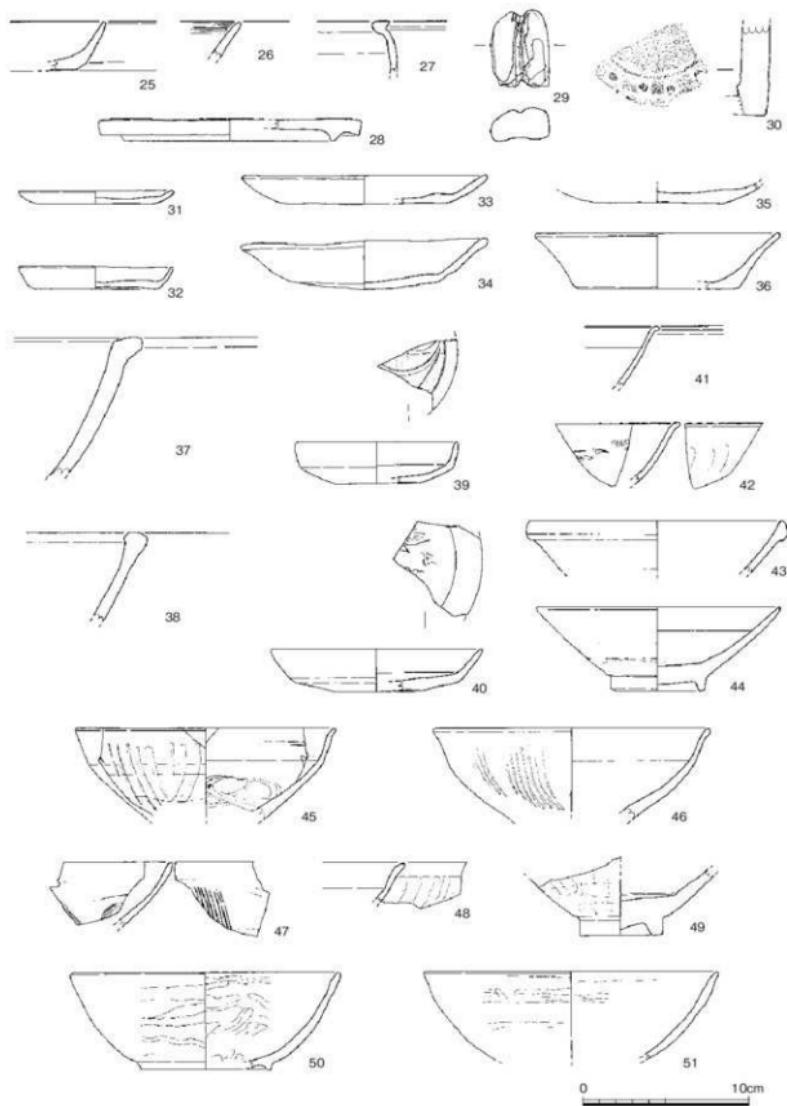
③土坑（SK）

SK002（第11図、図版2-2）

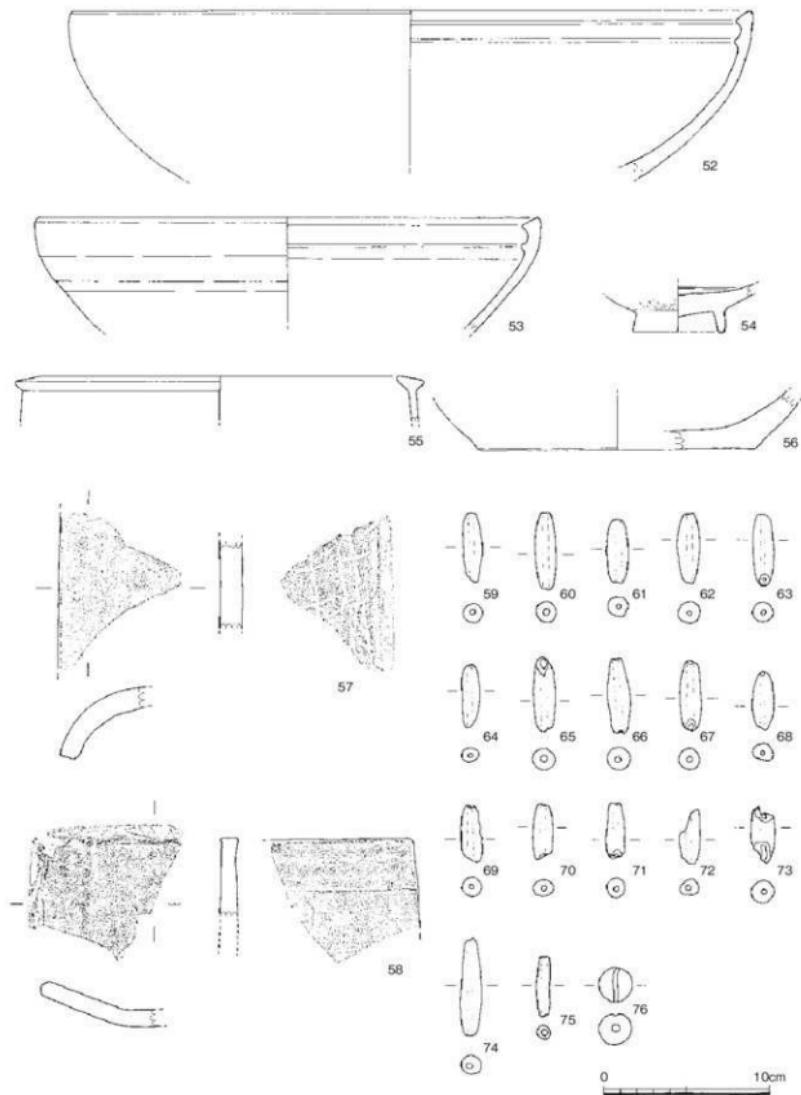
1区で検出した長軸3.3m、短軸2.2mの長方形土坑である。深さは40cmを測る。覆土は黒褐色砂と黄白色砂の堆積である。遺物量は多く、土師器、陶磁器、瓦器、鉄滓などが出土している。

出土遺物（第11図、第12図）

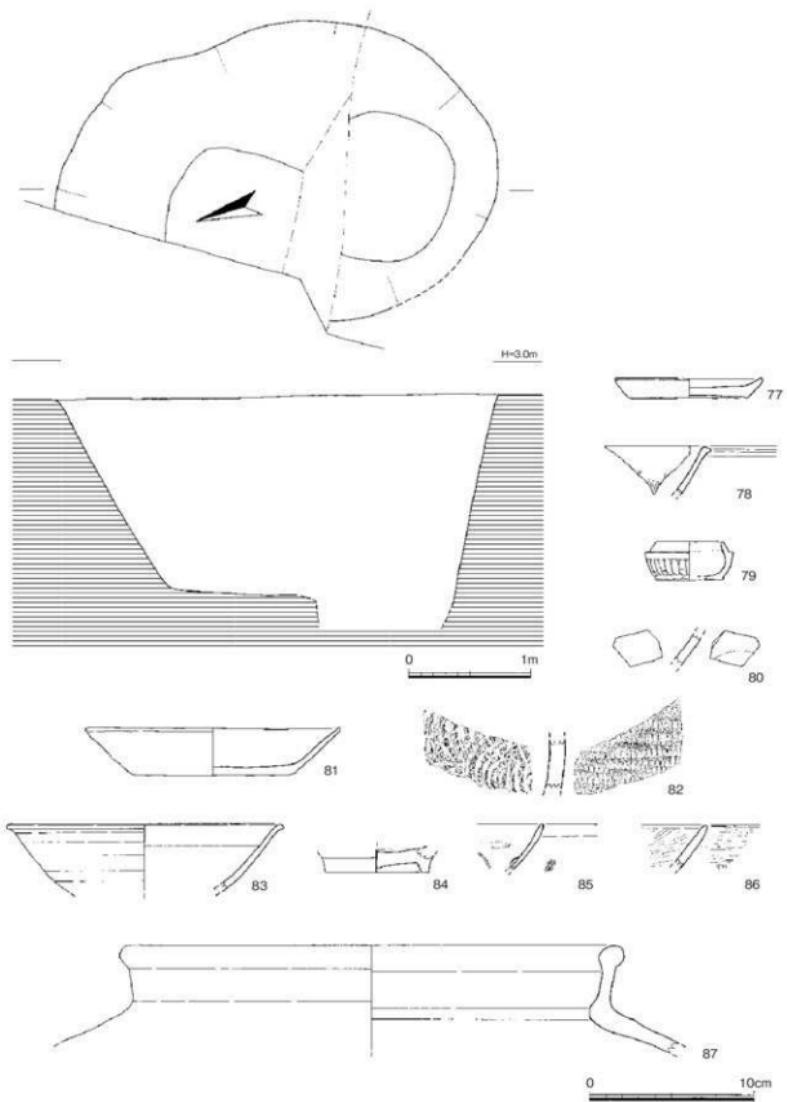
88・89は土師器皿、90～93は土師器壺である。89の底部はヘラ切りであるが、その他は全て回転糸切りで、いずれも板状圧痕が残る。94は瓦器の小皿、95～99は瓦器碗で、内外面にヘラミガキを施す。96は底部外面に「×」のヘラ記号が刻まれている。100は瓦器皿の底部で、内外面に不整方向のヘラミガキを施す。101～115は白磁である。101はV-O類の椀。103も同類か。102はV-4 b類の椀で、内面には櫛描文が施される。104はV-2類の椀か。105は白磁皿III-1類で、内面見込みの釉を輪状に搔き取る。106は白磁皿VII-1a類である。107はV-2類の底部。108はV類の椀で、外面には飛び泡の痕跡が残る。112はV類の椀で、内面に櫛目文を施す。111は白磁壺の底部か。113～115はIV類の椀



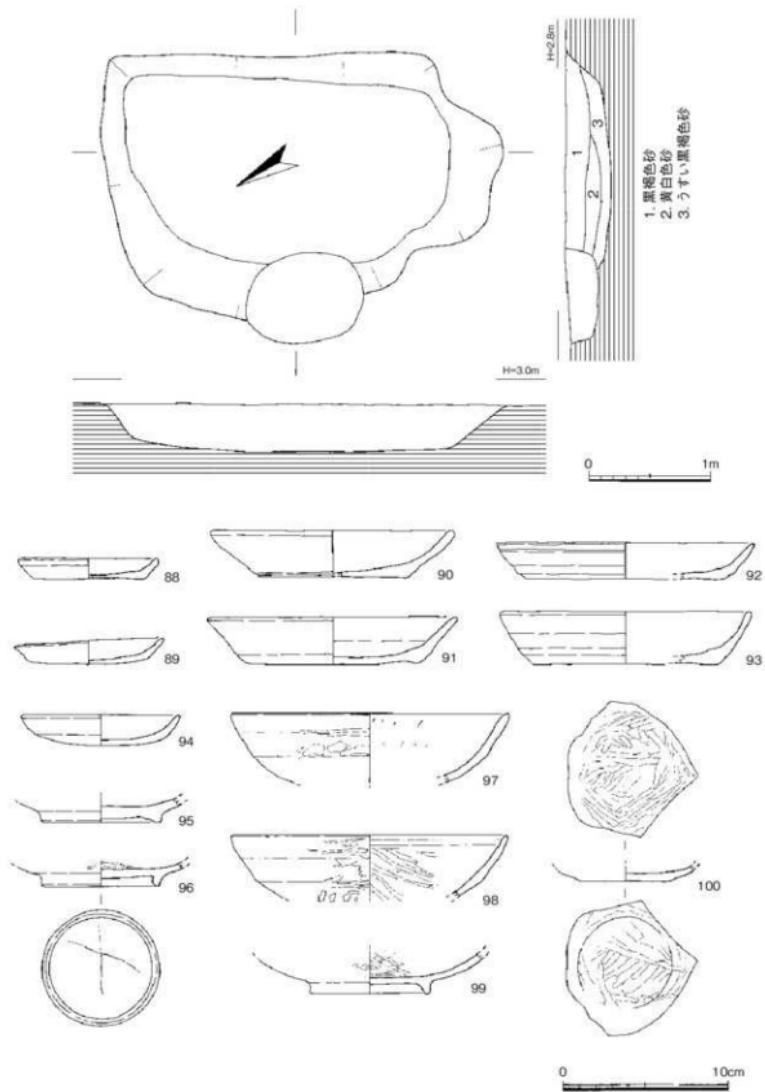
第8図 SD042出土遺物実測図① (1/3)



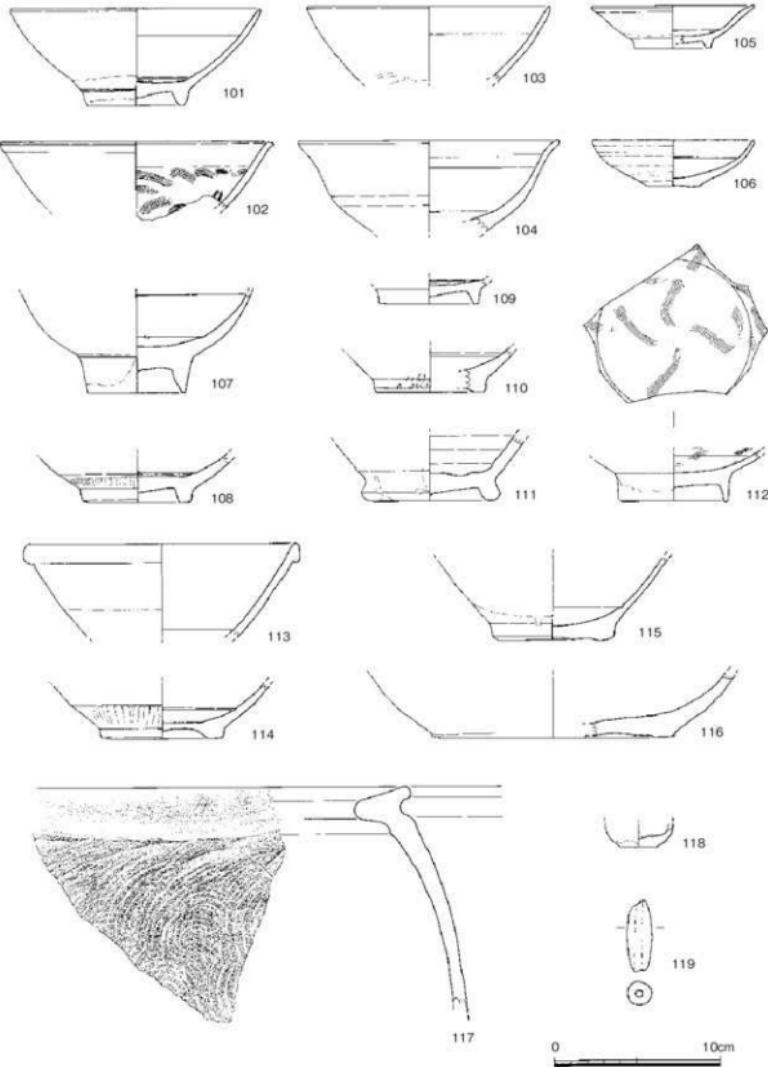
第9図 SD042出土遺物実測図② (1/3)



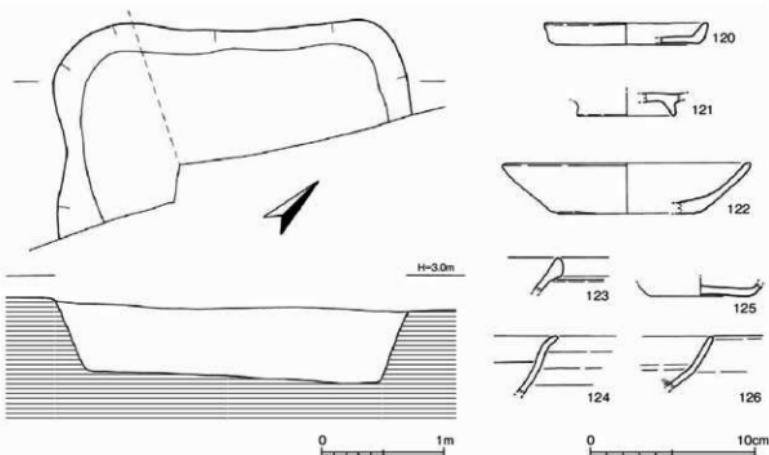
第10図 SE082実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第11図 SK002実測図（1/40）及び出土遺物実測図①（1/3）



第12図 SK002出土遺物実測図② (1/3)



第13図 SK023実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

か。116は陶器鉢の底部か。117は陶器の甕で、内外面に暗赤褐色釉がかかり、口縁部は釉を削り取り赤褐色に発色している。内面には同心円文の當て具痕が見られる。118は瀬戸の灰釉陶器か。119は管状土錐である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK023 (第13図)

調査区東壁にかかり、1区と2区にまたがって検出した。長軸2.9m、残存短軸1.75mの方形土坑である。深さ60cmを測る。土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦などが出土している。

出土遺物 (第13図)

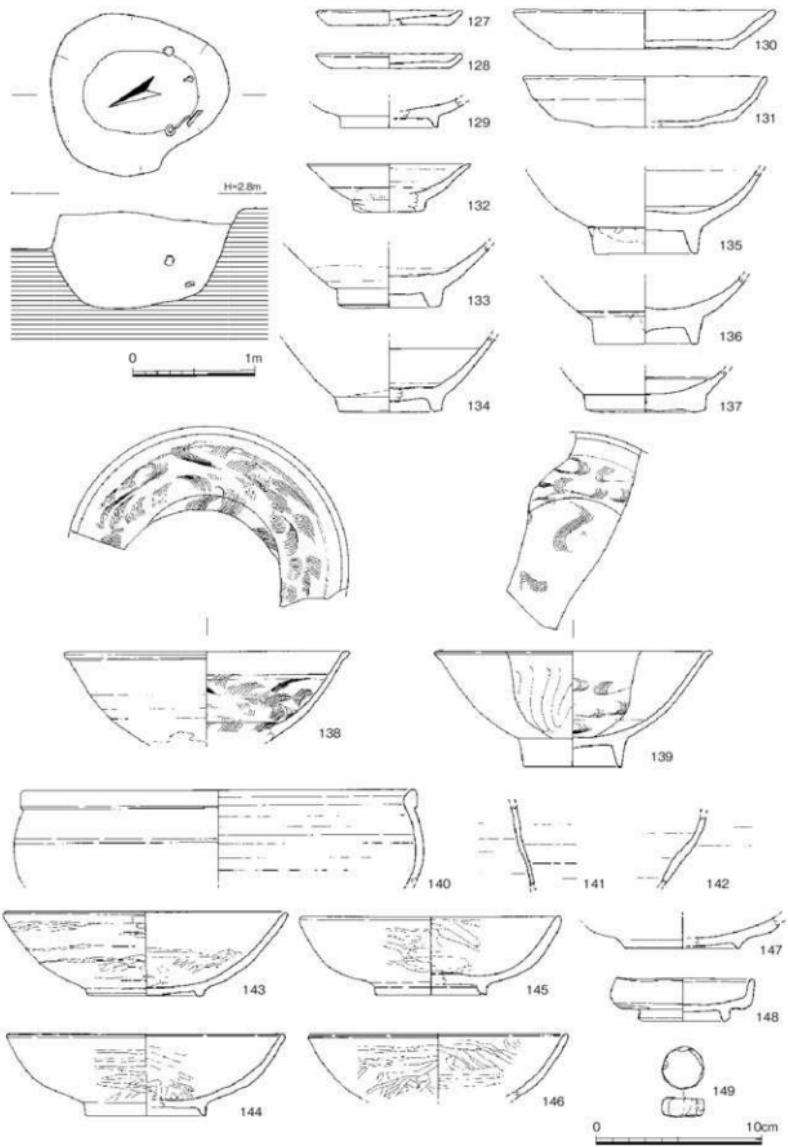
120は土師器皿、121は高台付の土師器皿である。回転ナデを施す。122は土師器壺で、底部外面は回転糸切り。123は白磁壺IV類の玉縁状口縁、124は白磁壺V類の口縁である。125は白磁皿の底部か。126は同安窯系青磁皿である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK033 (第14図、図版2-3)

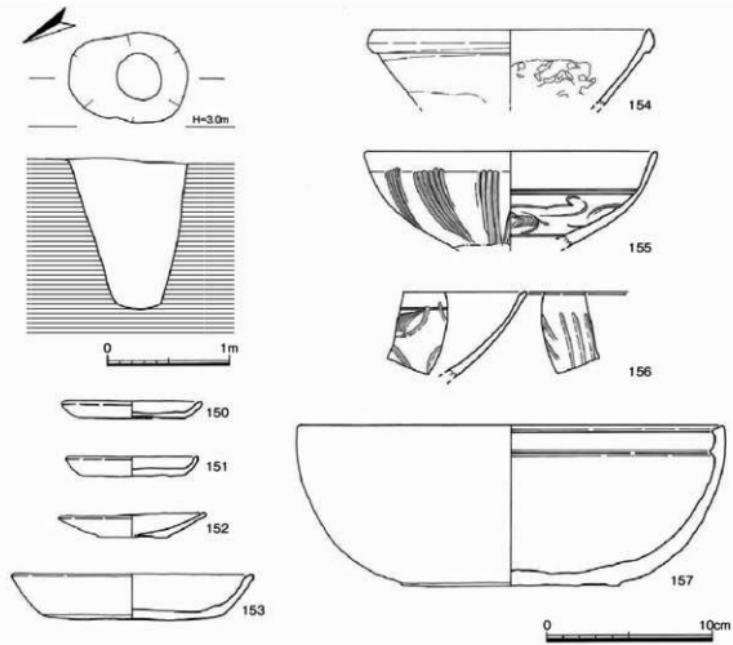
1区で検出した長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形土坑である。深さは80cmを測る。SK002に切られる。出土遺物は多く、土師器、陶磁器、瓦器、瓦、鉄片、獸骨などが見られる。

出土遺物 (第14図)

127・128は土師器皿、130・131は土師器壺で、いずれも外底面は回転糸切りである。129は黒色土器A類の椀。132は白磁皿III類で、外面には飛び鉋痕が残る。133～139は白磁碗である。133・134はI類の底部。135はV類の椀で、内面には沈線が巡る。136はV類、137はIV類の底部である。138はV-4b類で、内面には櫛描文が施される。139はV-4c類の椀で、内面に櫛描文、外面に緑色花弁文を施す。140～142は陶器である。140は鉢あるいは盤で、復元口径24.2cm、茶緑色の釉がかかる。141・142は水注の胴部か。143～147は瓦器椀である。いずれも内外面にヘラミガキを施す。148は瓦器の耳皿である。完形品で、両側を折り曲げている。口径8.8～10.0cm、器高2.7cmを測る。149は滑石製の石製円盤である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。



第14図 SK033実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第15図 SK040実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

SK040 (第15図、図版2-4)

1区で検出した長軸1m、短軸0.75mの楕円形土坑である。深さは1.2mを測る。比較的遺物は多く、土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦器、陶器などが出土している。

出土遺物 (第15図)

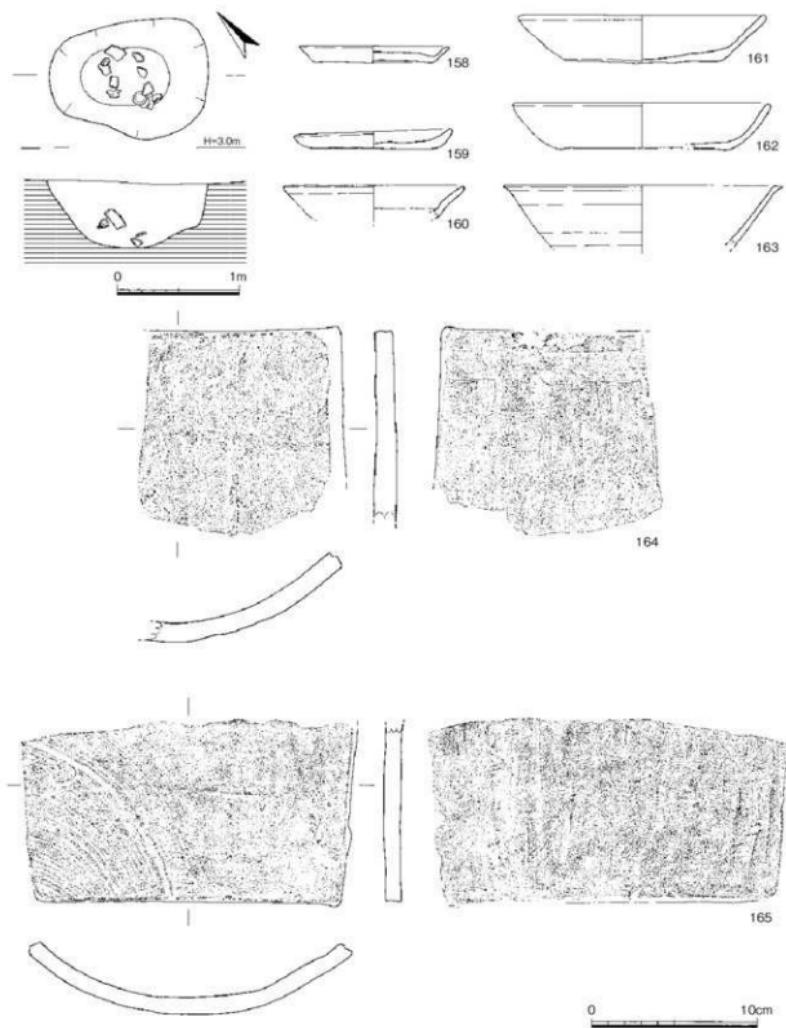
150～152は土師器皿、153は土師器壺である。底部外面はいずれも回転糸切りで、151・153は板状圧痕を有する。150・151はやや小型で、それぞれ復元口径8.6cm、8.1cm、器高1.1cm、1.2cm、底径6.5cm、6.4cmを測る。152は底部が小さく、体部が大きく開く。154は白磁椀IV類である。155・156は初期龍泉・同安窯系青磁O類の椀と思われ、ともに内面には片彫文と櫛目文を施す。155は外面に幅広の縦線を施し、156は外面に片切彫で縦方向に施文している。157は陶器の捏鉢である。これらの出土遺物から13世紀中頃の遺構と思われる。

SK069 (第16図、図版2-5)

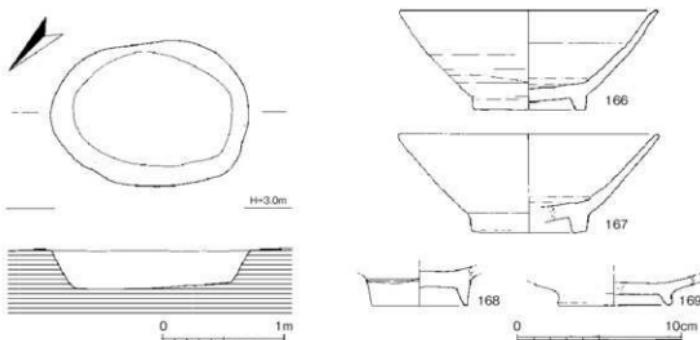
1区で検出した長軸1.3m、短軸1mの楕円形気味の土坑である。深さは55cmを測る。比較的遺物は多く、土師器の皿・壺、白磁、青磁、陶器、土鍋、瓦などが出土している。

出土遺物 (第16図)

158・159は土師器皿、161・162は土師器壺で、いずれも底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。160は白磁皿で、復元口径11.0cm。163は白磁椀V-4a類の口縁部である。復元口径17.0cm。164・165は



第16図 SK069実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）



第17図 SK084実測図(1/40)及び出土遺物実測図(1/3)

平瓦である。凸面は繩目叩きとナデ、凹面は布目の跡をナデ消している。165の凹面にはコビキ痕が残る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK084 (第17図)

1区で検出した長軸1.6m、短軸1.2mの楕円形土坑である。深さは30cmである。埋没後にSD006に切られるものと思われる。

出土遺物 (第17図)

166・167は白磁碗VII-2類で、見込みの釉を輪状に搔き取る。ともに内面には沈線が巡る。168は白磁碗V類の底部である。169は瓦器碗の高台部で、外面はナデ、内面はミガキを施す。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われ、SD006と明確な時期差は見出せない。

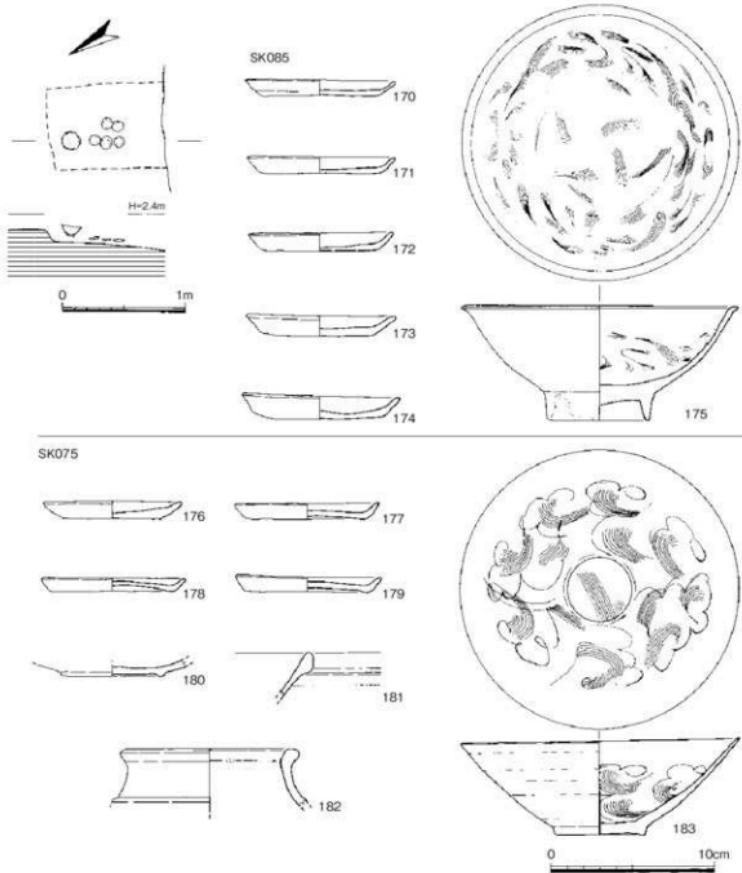
SK085 (第18図、図版2-6)

1区南西隅で検出した木棺墓である。遺構と搅乱の切り合いのために把握が遅れ、底面で完形の白磁碗と土師皿、鉄釘を検出してようやく木棺墓と認識した。当初は円形プランのSK075と搅乱の切り合いとして掘り下げていたため、SK075とSK085の遺物が混じっている可能性がある。SK075とSK085との切り合いや、そもそも両者が異なる土坑なのかも明らかにすることはできず、不十分な調査となってしまった。SK085からの出土遺物は白磁碗1点と土師皿5点である。いずれも完形で水平方向を保っている。白磁碗の横には頭骨と思われる骨片があったことから、棺内に副葬されたものと思われる。SK085の遺物が混じっている可能性のあるSK075出土遺物もここで報告する。

出土遺物 (第18図)

170～174は土師器皿である。いずれも完形で、底部は回転糸切り、板状圧痕を有する。175は白磁碗V-4 b類の完形品である。口径16.9cm、器高7.0cmを測る。内面には櫛目文を施し、沈線が巡る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

176～183はSK075出土遺物である。176～179は土師器皿である。いずれも底部は回転糸切りで、176・178・179は板状圧痕を有する。180は瓦器碗の底部で、外面はナデ、内面にはヘラミガキを施す。181は白磁碗IV類の玉縁状の口縁、182は陶器の蓋である。183は青白磁碗の完形品である。口径17.0cm、器高5.9cm、底径5.6cmを測る。底部は小さくわずかに削り出した上げ底で、体部はわずかに湾曲しながら外に広がる。口縁部は直口である。内面には櫛・籠による草花文が施される。13世紀中



第18図 SK085実測図(1/40)及びSK075・085出土遺物実測図(1/3)

頃のものが。SK085の他にも墓が存在した可能性がある。

SK086 (第19図、図版3-1)

1区南壁際で検出した直径1.2mほどの円形土坑である。深さ75cmを測る。土師器皿、白磁、青磁、瓦器、陶器、瓦、鉄釘などが出土している。

出土遺物 (第19図)

184は土師器皿で、口径9.1cm、器高1.2cmを測る。底部外面は回転糸切りで板状圧痕を有する。185は白磁碗V類の底部で内面見込みの釉を輪状に掻き取る。186は白磁碗V類の底部である。187は同窯系青磁皿I-2b類である。復元口径11.2cm、器高2.5cmを測る。オリーブ灰色の釉がかかり、内面

には櫛点描文を施す。**188**は平瓦で、凸面には繩目叩き、凹面には布目が残る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK091 (第19図)

2区で検出した直径1m前後の歪んだ円形の土坑である。深さは55cmを測る。土師器の皿・壺、白磁、青磁、陶器、瓦、鉄釘などが出土している。

出土遺物 (第19図)

189は土師器皿、**190**は土師器壺で、ともに底部は回転糸切りで板状压痕を有する。**191**は初期龍泉・同安窯系青磁O類の椀で、外面に幅広の縦線文を施す。**192**は白磁椀V類の底部。**193**は瓦器椀の底部で、外面はナデ、内面はミガキカ。**194**は陶器壺で、茶緑色釉がかかる。復元底径8.2cm、残存器高5.1cmを測る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK092 (第19図)

2区で検出した長軸1.4m、短軸1mの長楕円形土坑である。深さは60cmを測る。土師器皿、白磁、瓦、鉄滓などが出土している。

出土遺物 (第19図)

195は白磁椀V類の底部である。内面には沈線が巡る。**196**は黒色の釉がかかる口縁部である。天目椀か。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK095 (第20図)

2区で検出した長軸1m、短軸0.6m、深さ50cmの土坑である。土師器、白磁が出土している。

出土遺物 (第20図)

197は土師器壺の底部である。底部外面は回転糸切りである。**198**は白磁椀IV類の玉縁状の口縁部。**199**は白磁椀V類の口縁部である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK097 (第20図)

2区北東隅近くで検出した残存長軸1.35m、短軸1mの長方形土坑である。床面は二段掘りになつており、深さは最大で60cmを測る。土師器、陶磁器、瓦器、瓦、鉄滓などが出土している。

出土遺物 (第20図)

200は陶器鉢の口縁部か。褐色釉がかかる。**201**は龍泉窯系青磁椀I-6a類で、外面には片彫りの蓮弁と櫛目を施し、内面にも片彫文や櫛目文が見られる。**202**は初期龍泉・同安窯系青磁O類の椀である。復元口径16.0cm。口縁部が湾曲しながら外反し、外面には幅広の縦線文が施される。**203**は同安窯系青磁椀である。外面に片彫文、内面には櫛目文を施す。**204**は滑石製石鍋の転用品か。径8mmの穿孔が施される。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK098 (第20図)

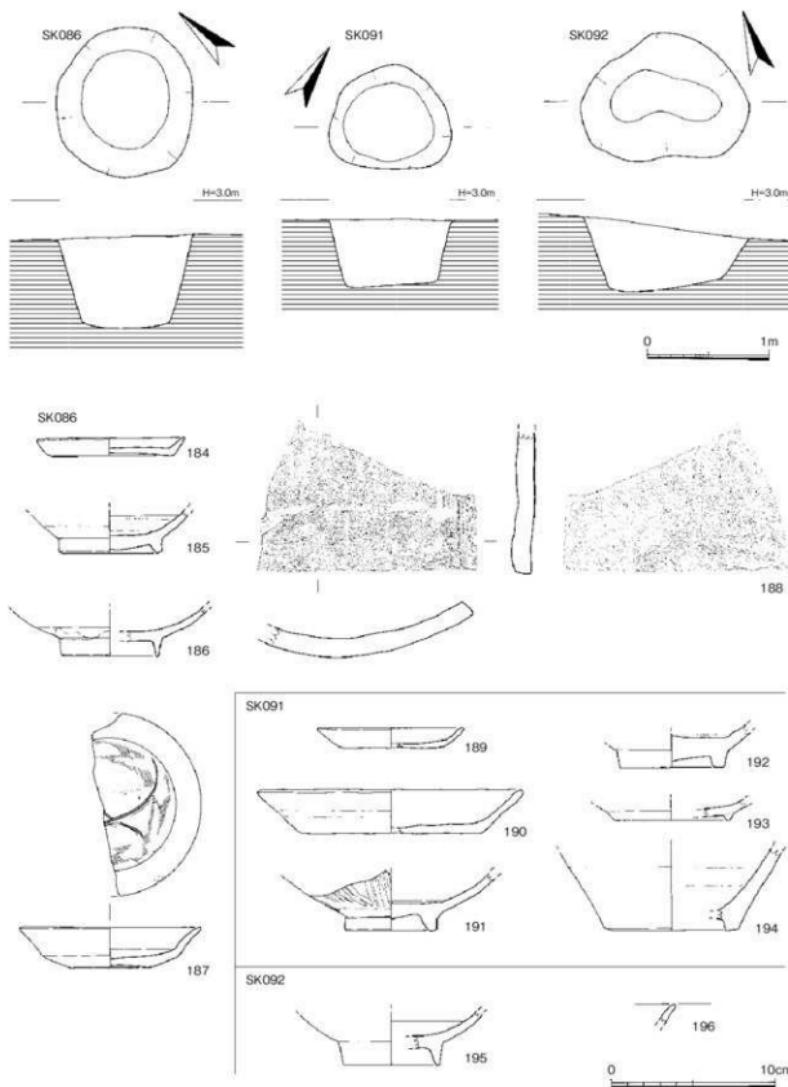
2区北東隅で検出した残存長軸1.9m、短軸1.2mの長方形土坑である。床面は二段掘りになっており、深さは最大で80cmを測る。土師器、陶磁器、瓦器、瓦などが出土地してある。後述するSX101の東側に位置し、覆土には消石灰らしきものも含まれていた。こちらは壁面に火を受けた痕跡はない。

出土遺物 (第20図)

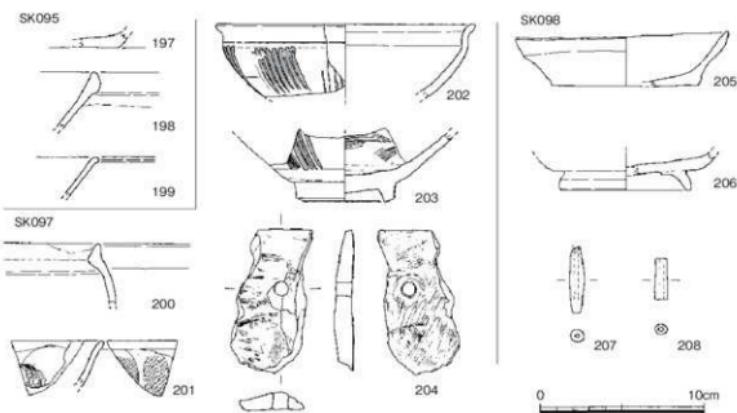
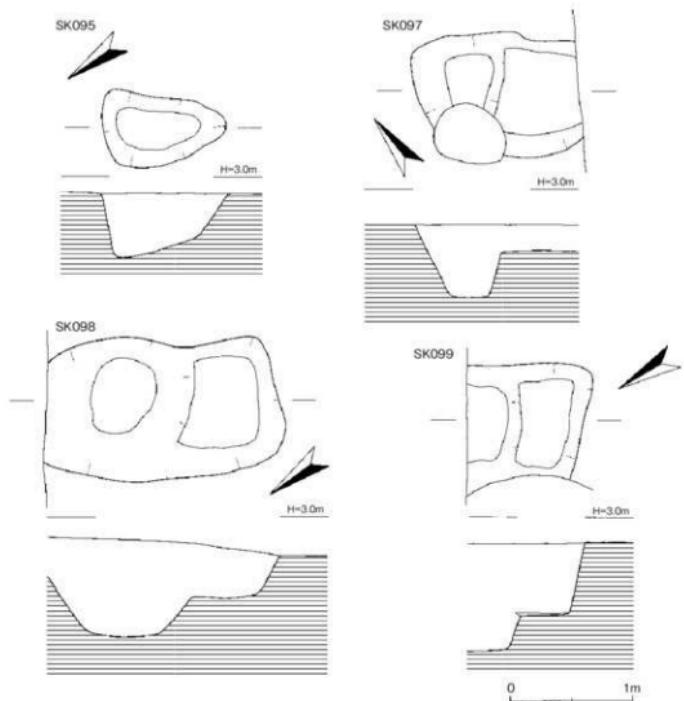
205は土師器壺で、口径13.0cm、器高3.0～3.3cm、底径9.0cmを測る。外面には焼成の際に黒変した部分がある。**206**は土師器椀の底部である。復元底径8.0cm。**207・208**は管状土錐である。これらの出土遺物から13世紀前半頃の遺構と思われる。

SK099 (第20図)

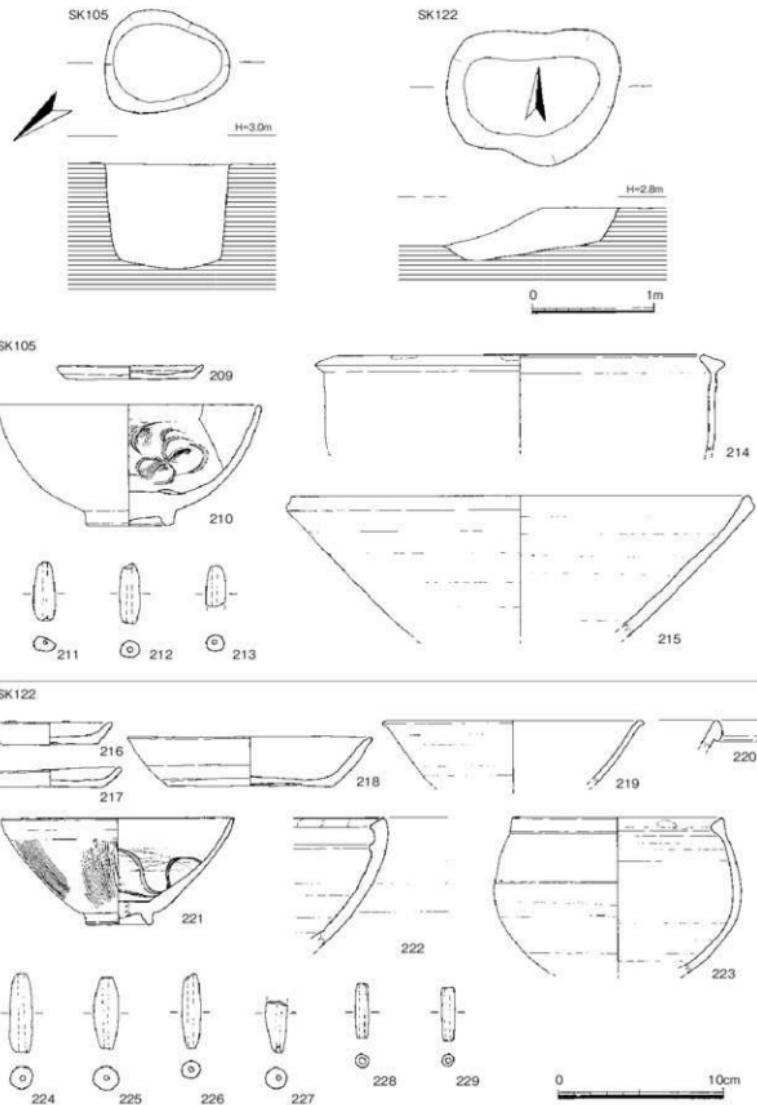
2区北東隅で検出した残存長軸1m、残存短軸0.9mの土坑である。床面は二段掘りになっており、



第19図 SK086・091・092実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第20図 SK095-097-098-099実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）



第21図 SK105・122実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

深さは最大で90cmを測る。土師器の皿・壺、白磁、青磁、陶器、瓦などが出土しているが、いずれも小片である。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK105 (第21図)

2区で検出した長軸1m、短軸0.8mの楕円形土坑である。深さは85cmを測る。土師器の皿・壺、白磁、青磁、陶器、須恵質の鉢、瓦器、瓦、土錐などが出土地していいる。

出土遺物 (第21図)

209は土師器皿で、口径9.0cm、器高0.9cmを測る。外底面には回転糸切りと板状压痕の痕跡が残る。

210は龍泉窯系青磁碗 I - 3 a類で、内面には片彫文と櫛目文を施す。211～213は管状土錐である。

214は陶器壺の口縁部か。褐色釉がかかる。口縁部上面には目跡が残る。215は瓦質の鉢である。復元口径28.6cmを測る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK122 (第21図)

2区で検出した長軸1.4m、短軸1.1mの土坑である。深さは30cmを測る。他の遺構に比べて覆土の黒味が強い。土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦器、瓦、土錐のほか、鹿角が1点出土している。

出土遺物 (第21図)

216・217は土師器皿、218は土師器壺である。いずれも底部は回転糸切りで板状压痕を有する。216は小型の皿で、復元口径7.8cm、器高1.4cm、底径6.0cmを測る。219は白磁碗V類、220は白磁碗IV類の口縁部である。221は同安窯系青磁碗 I - 1 b類である。外面は猫搔き、内面には箋描文と櫛点描文を施す。222は陶器の捏鉢、223はオリーブ黄色釉がかかる陶器鉢である。復元口径14.3cm、器高6.5cmを測る。224～229は管状土錐である。出土陶器は12世紀の組成であるが、小型の土師器皿が含まれることから、12世紀後半～13世紀の遺構と考えておく。

SK148 (第22図)

3区北壁際で検出した長軸1.9m、短軸1.7mの不整形土坑である。床面は二段掘りになっており、深さは最大で70cmを測る。南側は近世以降の搅乱に切られる。土師器の皿・壺、白磁、青磁、陶器、瓦器、擂鉢、瓦、染付などが出土している。近世以降のものか。

出土遺物 (第22図)

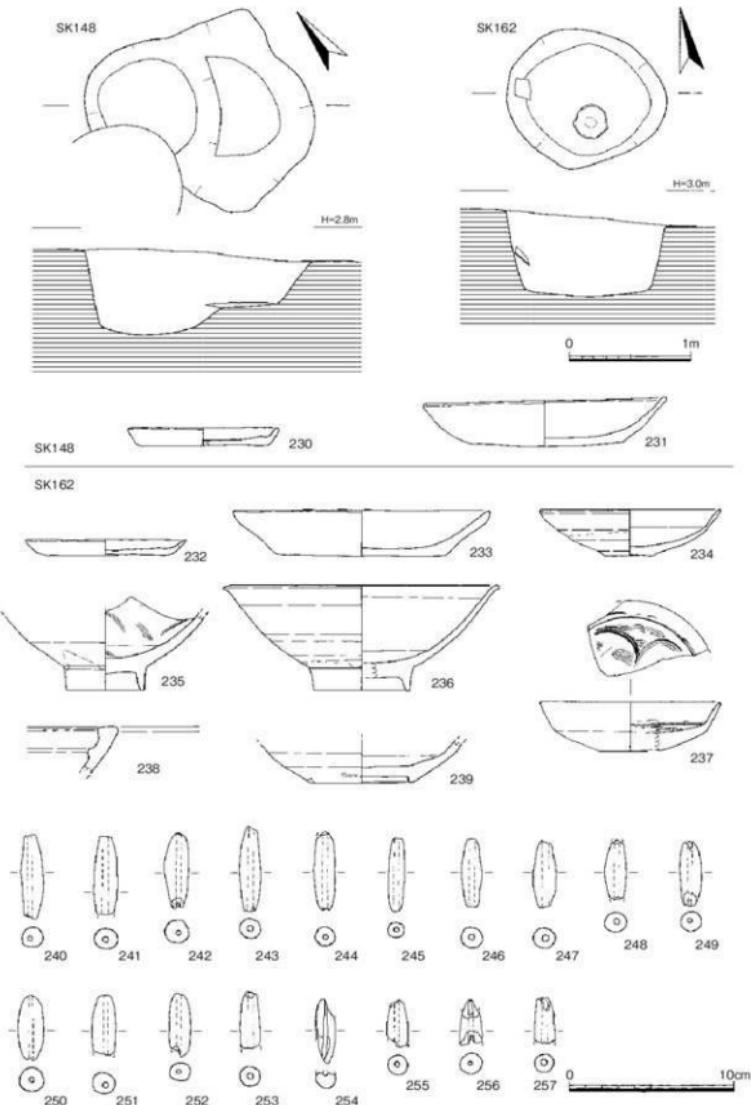
230は土師器皿、231は土師器壺である。ともに外底面は回転糸切りで板状压痕を有する。

SK162 (第22図)

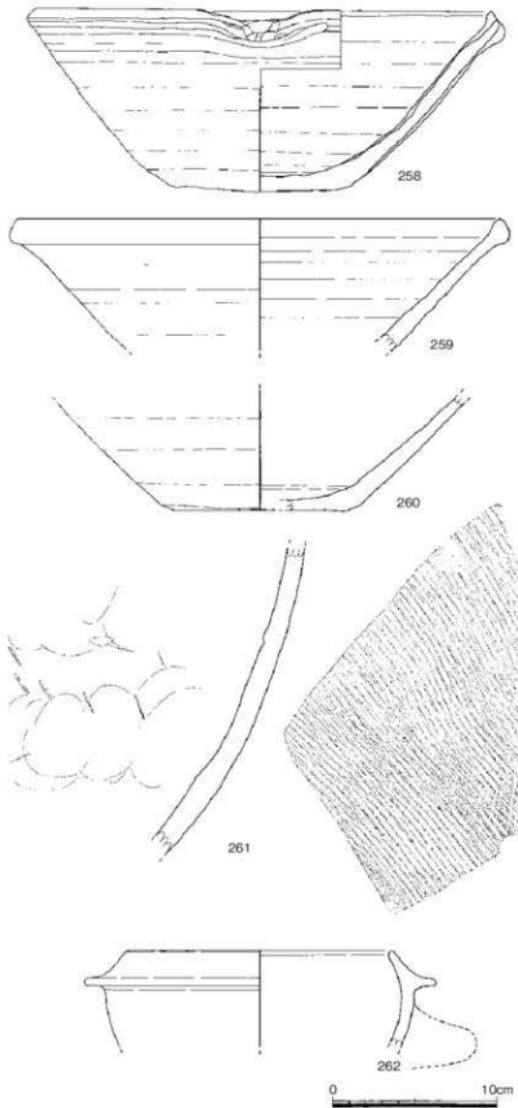
3区で検出した長軸1.3m、短軸1.1m、深さ65cmの楕円形土坑である。遺物は比較的多く、土師器の皿・壺、白磁、青磁、瓦器、陶器、須恵器、銅錢、獸骨などの他、土錐が多く出土している。

出土遺物 (第22図、第23図)

232は土師器皿、233は土師器壺である。ともに外底面は回転糸切りで板状压痕を有する。それぞれ復元口径9.9cm、15.8cm、残存器高1.0cm、2.8cmを測る。234は白磁皿VI - 1 a類で、復元口径11.0cm、器高2.9cmを測る。内面には沈線状の圓線が巡る。235・236は白磁碗V類の底部である。235は内面に櫛目文を施す。237は龍泉窯系青磁皿 I - 2 c類である。復元口径11.0cm、器高3.0cmを測る。内面見込みには箋描文と櫛描文を施す。238は陶器の捏鉢口縁部、239は陶器壺の底部である。240～257は管状土錐である。258は須恵質の片口鉢である。ほぼ完形で、口径29.3cm、器高11.2cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整で、底部外面には糸切りの痕跡が残る。259・260も須恵質の鉢である。261は須恵器甕胴部である。外面は斜め方向の叩き調整、内面には板ナデと當て具の痕跡が残る。262は土師質の釜である。復元口径16.4cm、残存器高5.3cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整で、口縁部下には鍔が巡る。胴部下位には張り出す部分が認められるが、欠損のため不明である。把手であろうか。これら



第22図 SK148・162実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図① (1/3)



第23図 SK162出土遺物実測図② (1/3)

の出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

SK174 (第24図)

3区で検出した長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形土坑である。深さは40cmを測る。

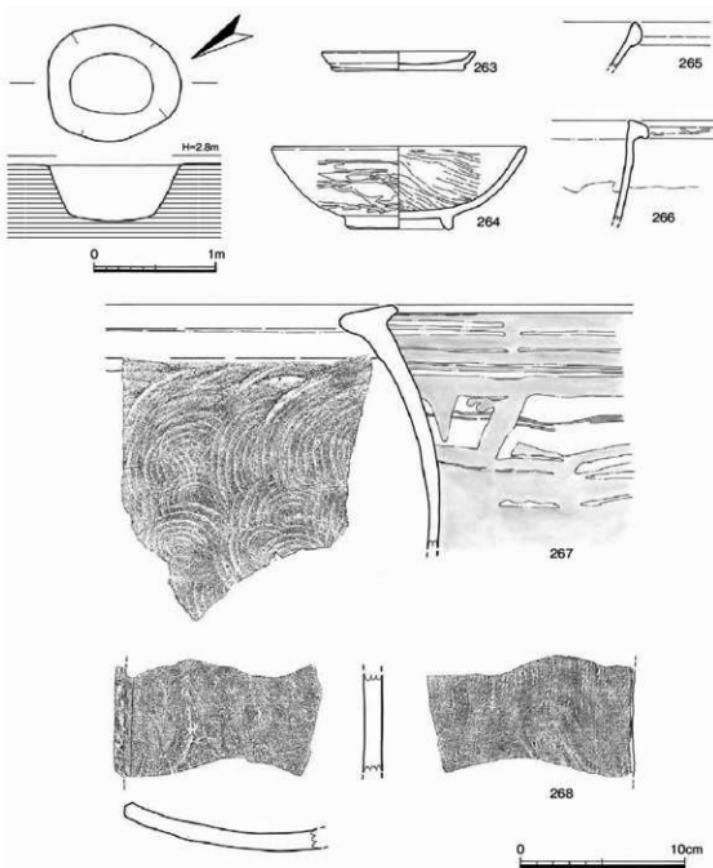
出土遺物 (第24図)

263は土器皿で、復元口径9.4cm、器高1.2cmを測る。外底面は回転糸切りで板状圧痕を有する。264は瓦器椀で、復元口径15.6cm、器高5.1cmを測る。内外面にヘラミガキを施す。265は白磁椀IV類の玉縁状口縁である。266・267は陶器甕の口縁部である。268は平瓦である。凸面は網目叩き、凹面には布目が残る。これらの出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と思われる。

④不明遺構 (SX)

SX101 (第25図、巻頭図版2-1、図版3-2、3)

2区で検出した貝殻及び焼土層である。長軸2m、短軸1.3mほどの楕円形状に分布し、北側は搅乱により削られている。上面には貝まじりの黒褐色砂が広がり、それを除去すると中心部付近に径1mほどの範囲で焼土が見られた。貝殻も火を受けて焼けている。山崎純男氏より、貝殻を焼き、肥料に用いる消石灰を得たのではないかとの御教示を頂いた。出土遺物は非常に少量であるが、底部糸切り



第24図 SK174実測図(1/40)及び出土遺物実測図(1/3)

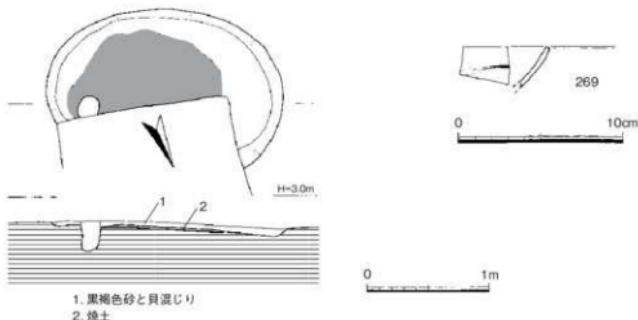
の土師器小皿、青磁の小片が見られる。出土遺物が少ないため時期がはつきりしないが、12世紀後半～13世紀の遺構であるSK122の上に広がっていること、消石灰らしきものが出土した東隣のSK098も13世紀と思われることから、本遺構の時期も13世紀頃と考えておきたい。第4章第2節において、山崎純男氏による詳細な報告を掲載している。

出土遺物（第25図）

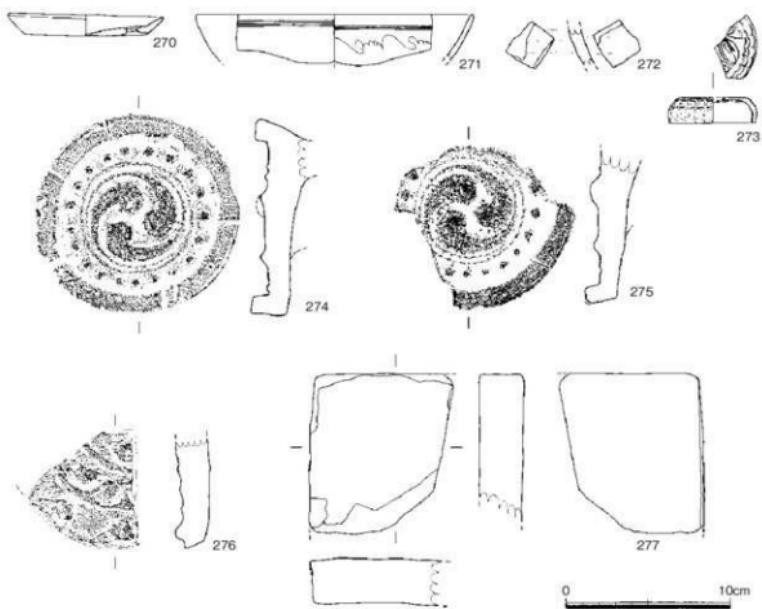
269は龍泉窯系青磁楕の口縁部である。灰オリーブ色の釉がかかり、内面には櫛目文を施す。

⑤その他の遺物（第26図）

270は土師器皿である。外底面は回転糸切りで板状圧痕を有する。底面中央と端の二ヶ所に穿孔を



第25図 SX101実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第26図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

施す。271は青磁椀の口縁部で、オリーブ灰色の釉がかかる。口縁部内外面には細い沈線が巡り、内面には細い片切彫りによる草花文が施される。270・271はSK161からの出土である。272は縁軸陶器の小片である。壺の胴部か。SP160からの出土。273は青白磁の合子蓋である。体部外面には菊弁文、上面には草花文を型押しにより施す。SK003からの出土である。274～276は軒丸瓦である。274は瓦当部分



第27図 出土鉄器・銅錢 (1/2, 1/1)

が完全に残り、三巴文の外側を珠文が巡る。274・275は3区検出時の出土である。276はSP161から出土した軒丸瓦の破片である。277はSK164から出土した壠である。

⑥出土金属器 (第27図)

278はSP061から出土した鉄製紡錘車である。残存長3.4cm、軸の幅はおよそ5mmである。

⑦出土銅錢 (第27図)

本地点では7枚の銅錢が出土した。錯で文字が読めないものも含まれていたため、全てX線撮影装置で判読を行った。279～282はSD042からの出土である。279は至道元寶、280は元祐通寶か元豐通寶、281は元豐通寶、282は祥符通寶である。いずれも北宋の銅錢である。283はSK162からの出土で、元祐通寶である。284は2区検出時、285は廃土より採集した寛永通寶である。

第4章 おわりに

1.まとめ

今回の調査では12～13世紀を中心とする集落と、近世遺構を確認した。調査区中央を南北に貫くSD042と東側のSD005・006は大学通りと並行しており、現在の町割にほぼ沿った集落の展開が認められる。また、本調査で特筆すべき遺構として、貝殻焼成遺構であるSX101が挙げられる。詳細な記述は次節に譲るが、中世農業史を復元する貴重な資料を得ることができた。

本地点は従来の遺跡分布地図では箱崎遺跡の北端に当たり、北側に向かって砂丘が落ちていくと予想されていた。しかし本調査の結果、砂丘はさらに北側まで延び、九州大学キャンパス内にまで遺跡が広がる可能性が高くなった。2009年度に実施された第65次調査でも同様の知見が得られており、遺跡範囲の把握が今後必要であろう。

2. 第61次調査出土の自然遺物について

箱崎遺跡第61次調査では、わずかであるがSK033、SX101、SP119、SK122、SK160、SK161、SK162から貝類、魚類、獸類等の自然遺物が出土している。遺構の大部分から出土した自然遺物は食料残滓の可能性が強いが、中にはSX101のように何らかの生産に関連したと考えられる自然遺物もある。以下、種の同定を行い、それらの自然遺物が遺跡に残された理由について考えてみたい。

①SK033出土の自然遺物

獸骨が出土しているが、骨の遺存状態が悪く、また、特徴のある部分がないので同定できない。

②SX101出土の自然遺物

貝類はスガイが蓋1点、殻46点、オオヘビガイが341点、211 g、ウミニナ類が33点、マガキが左殻274点、215 g、右殻349点、177 g、個体数が割り出せない貝殻950 gがある。貝類の個体数は769個体である。貝類の構成はスガイが5.98%、オオヘビガイが44.34%、ウミニナ類が4.29%、マガキが45.38%を占める。ここで注目されるのが、出土した貝類がすべて焼けた状態であることである。

③SP119出土の自然遺物

貝類はツメタガイが2点、コナガニシが1点、マガキが左殻67点、右殻102点、マテガイ左殻1点がある。個体数106個体。構成はツメタガイが1.89%、コナガニシが0.94%、マガキが96.23%、マテガイが0.94%となる。

魚骨はマダイの右の上顎骨1点が出土している。大きい個体の上顎骨で、長さ44.6mmを測る。

④SK122出土の自然遺物

鹿角1点が出土している。加工痕は見られない。

⑤SK160出土の自然遺物

貝類はタマキビガイ1点、ウミニナ類が2点、ツメタガイが1点、コナガニシが2点、サルボウガイが右殻1点、アサリが左・右殻各1点、ハマグリが右殻2点、シオフキガイが左殻7点、右殻8点がある。個体数は18個体。構成はタマキビガイが5.56%、ウミニナ類が11.11%、ツメタガイが5.56%、コナガニシが11.11%、サルボウガイが5.56%、アサリが5.56%、ハマグリが11.11%、シオフキガイが44.44%を占めている。

⑥SK161出土の自然遺物

魚骨3点が出土している。1点はマダイの歯骨の右である。歯骨から見てかなりの大型魚である。もう1点はマダイの主上顎骨（右）の破片である。他の1点は不明。

⑦SK162出土の自然遺物

2点の獸骨が出土している。種は同定できない。

7ヶ所の遺構から自然遺物が出土しているが、量的には少ない。自然遺物の種類は貝類が最も多く、魚骨と獸骨はきわめて少ない。ここで注目されるのはSX101の貝類である。SX101は遺構の項で述べられているようにやや大きめの土坑で、床面は焼けて赤変している。また、出土した貝類も全て焼けたものである。ここで注意されるのが、出土した貝類は食料の残滓ではなく、全てが打ち上げ貝であることである。打ち上げ貝を集め、それらを焼くことで何らかの生産を行ったと考えることができる。それを裏付けるように貝殻に混じって消石灰の塊が出土している。消石灰の出土量は397 gである。つまり、この遺構は貝殻を焼いて消石灰を生産した遺構と考えることができる。消石灰は酸性土壤の強い日本列島では田畠の肥料として使用されている。

図 版



1. 1区全景（東より）



2. SD005・006（南より）

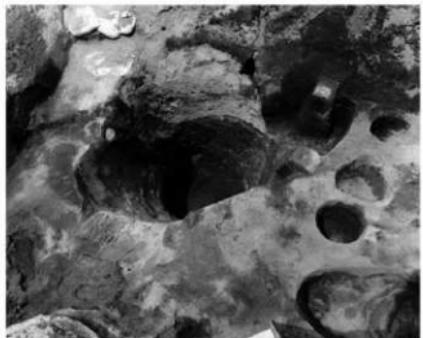


3. 1区SD042（南より）



4. 2区SD042（北より）

図版 2



1. 1 区SE082 (南より)



2. SK002 (西より)



3. SK033 (北より)



4. SK040 (北より)



5. SK069 (北より)



6. SK085 (南より)



1. SK086 (南より)

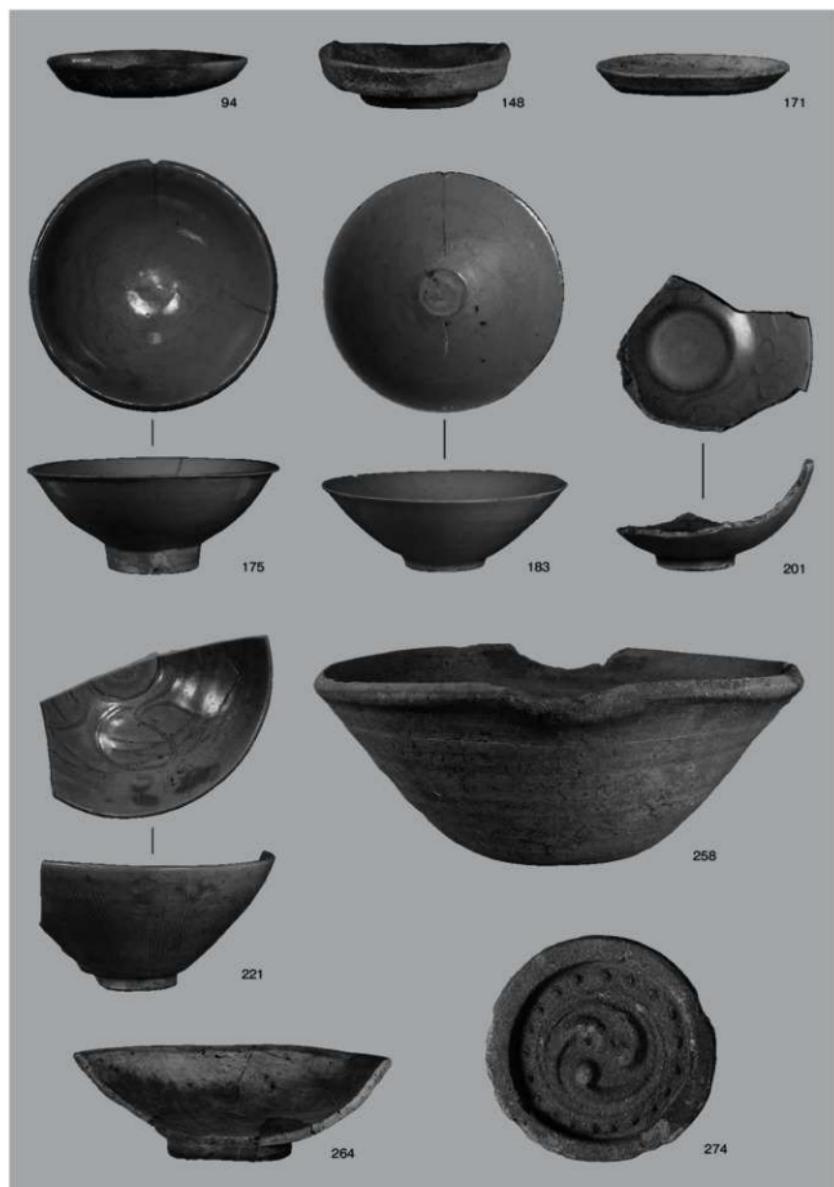


2. SX101検出状況 (北より)



3. SX101貝層検出状況 (北より)

図版 4



出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	はこざき39				
書名	箱崎39				
副書名	箱崎遺跡第61次調査報告				
卷次	箱崎39				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	1092				
編著者名	今井隆博				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2010年3月23日				
調査期間	2008年5月12日 ~ 2008年6月12日				
調査面積	190m ²				
調査原因	共同住宅建設				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 (世界測地系)	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		
はこざきいせき 箱崎遺跡 第61次	ふくおかけんふくおかしひがしきはこざき 福岡県福岡市東区箱崎 3丁目3371-1、3373-3	40131	2639	33° 37' 14"	
33° 37' 14"	130° 25' 30"				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第61次	集落	中世	溝4 土坑多数 木棺墓1 ピット多数 貝殻焼成遺構	土器・瓦器 須恵器・土器 陶磁器・瓦 銅錢・貝	12~13世紀を中心とする集落 遺構と木棺墓を検出。現在の 町割に沿った区画溝を確認し た。その他に、肥料とする消 石灰を生産した貝殻焼成遺構 を確認した。

箱崎39

—第61次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1092集

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
(092) 711-4667

印刷 月成印刷
福岡市博多区下呉服町5-27
(092) 271-0675